

志論

こうろん

私はコンサルタントなので顧問とつく肩書きを幾つもやっています。その一つが日本経済新聞の出版社会社が出している季刊教育誌DUCARE(デュケレ)の顧問だ。顧問だけでなく連載も持っている。学校訪問シリーズだ。

海外での学校視察もよく行つて、慶應(ユーハイク高校や、スペインの料理学校であるルイス・イリサール料理学校などを取り上げた。

昨年11月に訪問したのは、秋田にある公立大学・国際教養大

学だ。

国際教養大学は卒業生の就職率がほぼ100%で、その多くが上場企業に就職する」と有名だ。他にも、授業の全てが英語で行われ、4年間のうち1年は海外提携大学に留学しなけれ

がたまっていたので、具体的な内容を探るべく、自ら取材に行

くこととした。

取材に当たり何より楽しみにしていたのは、学長の中嶋嶺雄さんと話を聞くことだった。

中嶋先生は単なる学者ではなく、国際化とグローバル化の違いは分かりますか?」と聞かれた。苦笑いで「まかしたが、後で頂いた資料で、教養とは何かといふことを思い知った。3月発売号でインタビューは掲載される。と書いた日に、残念ながら、中嶋嶺雄先生はお亡くなりになつたといつお知らせがありました。ご冥福をお祈りいたします。

（石井至）

中国で文化大革命が起ると、東京外大の教員（公務員）では、今書いたようなギャッチャーは、マスクで取り上げられるのは、今書いたようなギャッチャーばかりで、その内実についての突つ込みが足りない。他の取材記事を読んでいてストレス

いい。若い日、1966年にマスクで取り上げられるのは、今書いたようなギャッチャーばかりで、その内実についての突つ込みが足りない。他の取材記事を読んでいてストレス

国際教養大学を訪問 中嶋先生の話を楽しみに

いい。若い日、1966年にマスクで取り上げられるのは、今書いたようなギャッチャーばかりで、その内実についての突つ込みが足りない。他の取材記事を読んでいてストレス

いい。若い日、1966年にマスクで取り上げられるのは、今書いたようなギャッチャーばかりで、その内実についての突つ込みが足りない。他の取材記事を読んでいてストレス